



雨の日文庫

現代日本文学・戦中戦後編

絵本

田宮虎彦作

第4集 10

***雨の日文庫=4 <現代日本文学・戦中戦後編>**

*1967年9月30日 発行

*1980年9月30日 4刷

*監修者 阿部知二・小田切秀雄・佐々木基一・国分一太郎

*発行者 布村哲夫

*発行所 東京都文京区関口 3-2-1 有限会社 むぎ書房

TEL (947) 4530 振替東京 5-27913

*印刷所 船舶印刷株式会社

*装丁者 栗津潔

絵本

田宮虎彦作・絵久米宏一



雨の日文庫第4集

10

麻布霞町の崖下にあった私の下宿には、三連隊の起床ラッパが遠くかすかにきこえて来た。それは、青山墓地の崖肌を這い木々の下枝をぬって、切なくかなしげに聞こえて来ては、しばらくはしめつばい余韻を私の耳にまつわらせるのだった。

私は大学にはいったばかりであった。というより、やっと大学まで辿りつくことが出来たばかりといった方がよかつたであろう。三連隊の起床ラッパがきこえて来るのは、そんな私が夜通し謄写版の原紙をきりつづけ、やっと冷たい布団にくるまった頃であった。私は、これからつづく大学の三年間を、その謄写版の原紙きりの仕事だけで支えていこうと直面目に考えていたのであった。

大学にはいったといっても、既に父にきからって家を出ていた私には学資の出るあてはなかった。しいていえば、母が父にかくれて送ってくれる金があるにはあったが、それもあてに出来る金ではなかった。ひと

月に一度かふた月に一度、母は、手紙にしのばせて一枚の五円紙幣を送ってくれるのであったが、もし父にみつけられたとしたら、母が父から受けねばならぬ折檻がどんなものか、その父の折檻に苦しめられつづけて家を出た私にはいやというほどわかつていたし、よし父にみつけれぬまでも、母にそんな金を私に送る余裕などないことも私は知っていた。母はその金をつくるために、父にかくれて近所の縫いものをひきうけたり、手紙の代筆をしたりしているに違いなかった。

それが病弱な母の生命を削っていることも私にはわかつていた。私は出来ればその金をあてにすることなく学業をつづけたかったのだ。大学の試験に合格した時、私は一度、母にもう金はおくってくれるなと手紙を書いた。どうしようというあてがあったわけではなかった。あるいは、それは、大学にはいったという私のはかない見栄であつたかもしれぬ。だが、母から来たその手紙の返事には、やはり五円の紙幣が、どうか

無事に大学を卒業しておくれと書いた便箋に折りこまれて入れてあった。私は、その母の文面と五円の紙幣とをみつめながら、心の中では、その金を送りかえすことの出来ぬ自分をみつめつけていたのであった。

三連隊の起床ラッパがきこえる前に、私の隣りの部屋にいた中学生が起きだすのだった。息をひそめるようにして身支度している中学生のけはいが、耳にきこえる音ではなく、風のように私の肌を感じられた。私は原紙をきる鉄筆を置き、しびれるほどに疲れた右手の指を左手の指でもみほぐしながら、中学生が木戸をあけて表に出て行くのを待った。そして、その足音が表通りに消え去ってから、私は立ち上がり、寝る支度にかかるのだった。私が冷たい蒲団にくるまった頃、連隊裏の崖下を一番電車がレールを軋ませて近づき遠ざかって行き、やがて、遠く切ないラッパの音がきこえて来る――

それは、私が効かった頃から教えこまれていた――

新兵さんよ起きろよ、はよ起きろ、おきなきや古参兵に叱られる、という起床ラッパの節には違いはなかったが、私には勇しい軍隊の起床ラッパとはきこえず、何故かものかないしい思いをそるようきこえて来るのだった。そして、私は浅い眠りにひきこまれてゆくのだが、私とその眠りからめざめるのは九時近い頃であつた。下の五つになる女の子が土間からかけられた急な狭い梯子段を中ほどまで上がって来て

「コケコッコウ、ヨガアケタ」

という遊び声を一人で幼くくりかえしているのが、私の耳に次第にはっきりときこえて来て、私は眠りからめざめるのだった。女の子のその遊びは、九時近くまで寝ている私へのあてつけでは勿論なかったであろうけれど、私には、やはりそれと同じ役目をはたした。私は起きて、ぬるい味噌汁で朝飯をかきこみ、また昨日と同じ一日を型のようにくりかえしはじめるのであつた。

その下宿をやっと探しあてるまで、私は一緒に大学を受けた西野という高等学校で同級の友人のアパートにいた。大学の入学試験が終っても帰って行く家のない私は、西野のためにアパートを探すという事で幾許かの金を西野から貰い、東京に居残った。見晴しのよい、二間か三間つづきの、静かな、きれいな……といった様々な条件を西野はいいのこしていった。私は地図をたよりに東京の町を数日あるきまわって、やっと西野のいいのこした条件になつたアパートを見つけた。そこだけが、そうぞうしい東京の賑わいから置き忘れられたように、静かな木立にとりかこまれていた。その木立がこぶしに白くいろどられ、やがて桜の花びらにうずもれ、新緑にかわってゆくのを、私は、茗荷谷ハウスというそのアパートの西野の部屋からながめながら、西野の上京を待った。

アパートの西野の部屋は、西野がいいのこしていったとおりに応接間をかねた書斎と居間のほか、厨房と厨

房のわきに納戸のようにについている三畳まであった。そんなアパートを探すこともむずかしいことではあったが、私が借りることの出来るような下宿をさがすことは、なお一層むずかしいことであつた。それはどんなに狭くても、またどんなに汚くてもよかつたけれども、ただ、それを借りる金だけが問題であつたのだ。

私は西野の上京を待ちながら、毎日、自分の下宿をさがしあるいてみたが、いつか、私には部屋を借りることなど不可能に近いことのように思ははじめて来た。そして、もしや西野が納戸の三畳を、私に貸してくれはせぬかという甘い夢を心に描くようになっていた。

それは全く望みのないことでもなかつた。西野がさまざまな条件を私にいいおいて行つた時、冗談であつたかもしれないが、もし広いアパートをみつけることが出来たら、御礼に私をその一部屋においてもいいといつたからである。私は西野を待った。だが、西野は上京してくると、もはや奴僕は必要なくなつたといつた

ように私の願いをききいれようとしなかった。

私がやっと墓地下の下宿をみつけ出して来た時、麻布霞町六番地——という下宿の所番地を西野につけると、西野は

「ほう、麻布霞町、ブルジョワやがな」と嘲けるようにいった。

私は、西野の上京する十日程前から、神田淡路町の明文社という謄写印刷に働きにいった。私にその下宿を世話してくれたのは、その謄写印刷で手を真黒にして刷り屋をやっていた渡辺という老人であった。老人はその時、私に

「下宿代はたのめば少しはまけてくれるだろう」といってくれた。老人の教えてくれた月十三円という下宿代は、西野の借りているアパートの部屋代の三分の一にも足りぬ額であった。東京中を探しあるいた私には、二食をつけて十三円というその下宿代は、最低、といつていい額であるとなっていた。私は、勿論、

そんな下宿代までを西野につけたわけではなかったが、下宿のあったことを西野に話した時、西野から——ほう、麻布霞町、ブルジョワやがなとかえされた時、瞬間、私はぎくつとした。その西野の言葉に渡辺老人のいった十三円があるいは部屋代だけの間違いであるかもしれぬという思いが、私の心を稲妻のように走ったのだった。

しかし、渡辺老人は、たしかに朝夕二食をつけて、といった筈であった。そうはつきり思いかえずと、今度は、私の心に、奇妙な幸運が自分に恵まれているのではないかという思いが、みるみる大きくひろがっていった。だが、翌日、私が渡辺老人から教えられた道筋をたどって行くと、なるほど麻布霞町は堂々とした邸町ではあったが、その邸町の崖をおりた六番地は、やはり貧しい私にふさわしいごみごみとたてこんだ家並がつづいていた。私の心の中にふくらんでいた夢のような幸福は、忽ち消え去ってしまったが、その失望

の裏で、私は却って何とない安堵を感じて、ほっと力のない微笑を頬にうかべてみたのだった。

私が渡辺老人からの手紙を、背の低い内儀さんにわたすと、内儀さんは眼で、私に急な梯子段をさして

「むさくるしいが、お上がりになって」

といった。部屋は渡辺老人のいったように四畳半であった。だが、妙に細長く見えた。それは、あとで私に納得がいったのだが、隣りの中学生のいる部屋をつくるために、黄いろく日に灼けた古畳が不揃いに狭くきられていたからであった。その隣りの部屋との間は襖でなく、四分板がうちつけられてあった。私は渡辺老人から聞いて来たように

「下宿代を何とかもう少ししまけてもらえないものでしょうか」

と試みてみた。その私の言葉をきくと、内儀さんは、さっと暗い顔をその頬に走らせて、へたへたと私の前に腰をおとした。そして、私をみあげながら

「高すぎるでしょうか、物は高いし、それに——」

と悲しげにいいよどんでから

「子供がわずらったりしているもので」

と、いいわけでもするようにつけ加えた。

そういえば、内儀さんが針仕事をしていた奥に布団

がしいてあって、誰か寝ていたようであった。内儀さんは返事をせぬ私に物価の高いことをくどくどくりかえしていたが、やがて、唾をのみこむようにしながら

「五十銭だけおひきしましょう」

とやっといった。私は、内儀さんの頬がその瞬間、みにくくひきつれるのを見た。そして、私自身の頬も同じようにひきつれるのを意識しながら、私はぎこちなく

「それではお願いします」

と、力なくいってしまっていた。私は一円ぐらいひいてもらうつもりであった。だが、内儀さんがひこうといった五十銭が、その家族にどれほど大切であるかと

いうことを、内儀さんの頬の歪みに、私は感じとってしまっていたのであった。

下宿の主人は広瀬隆剛といういかめしい名前であった。五反田とかの工場の外交に出ているという、やせぎすな男であった。歳は五十前後でもあっただろうかとすれば、背の低い、人の好きそうな内儀さんは四十前後という年配のようにも思えたが、時には主人よりも年老けてみえることもあった。そして、七十近い老婆と、男の子が一人、女の子が三人という七人家族であった。病気で寝ているといったのは、一番上の男の子で、あとで脊髄カリエスときかされたが、十三歳になるというのに、その下の十歳の妹よりも小さくしなびた顔をしていた。

私が、朝、下において行く頃には、主人も、小学校に通っている二人の女の子ももういなかった。そして、病気の男の子が、六畳の奥の間から、じいっとみつめるように私をみた。小さくしなびた顔が、変に大

人びた感じであったが、眼だけは黒眼がちに光るように澄んでいた。私はその男の子の眼差をまともに受けて、朝飯をかきこんだ。きまったように菜っぱの味噌汁と沢庵——それがその家の朝食であった。

私とその少年と話をしようになったのは、私がこの家にうつっていつてから十日ばかりたった朝のことであった。いつものように私が下において行くと、老婆も内儀さんもいず、顔を洗いおわった私がどうしたものかとまどっていると、奥の間から、不意に

「——さん」

と、私の名をよぶ、絹糸のように細く澄んだ声がかきこえた。

私は、はっとした。私は今まで、そんな美しい声を聞いたことがないような気がした。だが、寝ている少年のほかに、私をそういつて呼びかける人はいなかった。私は、奥の間の少年をのぞきこんで

「お母さんもおばあさんもいないの」

ときいたが、少年は私の問いかけには答えず

「戸棚とだなの中にいつものように用意してありますから、お上がりになって下さい」

と、私にかえた。私は、少年のいったように、私の
 になっている味噌汁みそじゆの碗わんと飯茶碗めしちawanを出して、いつもの
 ように少年の澄んだ眼の見えるところで朝飯を食べは
 じめた。少年はそんな私をじっとみつめながら、時々
 何かいいたげに唇くちびるのはしをかぼそく痙攣けいれんさせた。私が
 じっとみつめかえすと、やがて、少年は思いきったよ
 うに

「——さんはいつも何しているんですか」

ときいた。やはり美しい声であった。私には少年の間
 いかけている意味がわからず

「え——？」

とききかえすと

「そら、カリッカリッって音をさして——」

といった。

「謄写版の原紙に字を書いているのだよ」

私は、そう少年に答えながら、この少年が、夜ねむ
 れないでいるのではないかと、ふっと思って

「あの音がきこえて眠れないの？」

ときくと、少年は青くしなびた顔を一瞬ぱっと紅あからめ
 それから自分ひとりにだけきこえるような小さな声で
 「時々」

と答えた。だが、すぐ

「でも、昼間ひるま寝ねているから、眠れないんだってお母さ
 んがいうんです、きつと、そうかもしれないね」
 と、大人おとなびた返事をつけくわえた。

私はその日から、老婆も母親もいない時には、朝食
 をたべながらこの少年といろんな話をするようになった。

老婆が時々家にいないのは、近くの家に留守居るすいにた
 のまれて行くからであった。そんな日に、内儀うちぎさんが
 出来上がった仕立物したてものをとどけに出かけたりすると、私

が起きる頃には、二人とも家にいないことになるのだ
った。私が文春というその少年から、一家の故郷が東
北の小さな町であることや、老婆が内儀さんの母親で
あることや、その少年が学校で友だちに煉瓦を背中に
投げつけられてから病氣になったことなどを聞いたの
は、そんな朝であった。

もう一年余りもギブスをはめて寝たつきりになつて
いるという少年は、いつか、私のおりて行くのを人な
つこく待っているようになった。じつと寝てばかり
いると頭は剃刀の刃のようにとぎすまされて行くの
か、私には、少年の言葉が十三歳とは思えないほどに
大人びて聞こえる時があった。内儀さんがいなくて老
婆だけがいる時など、老婆が私に愚痴をこぼしはじめ
ると、少年は

「おばあちゃん、おばあちゃん」

と、切なげに老婆をよんでその愚痴をやめさせようと
身をもがいた。老婆の愚痴はいつも、広瀬隆剛という

主人のことであった。その主人が人にだまされて失敗
するまでは、故郷の土地で一家がどんなに裕福な生活
を送っていたかといったようなことを、齒のぬけた聞
きとりにくい言葉で老婆は私に話してきかせ、最後に
は老婆はきまつて

「隆剛も折角専門学校さいれたけど、何の役にも立た
ね」

といつて、私をも哀れむようにみつめるのだった。

「おばあちゃん、おばあちゃんてば」

そうした話の間中、少年は、老婆の言葉をさえぎろ
うとして老婆を呼びつけ、その努力がむなしいとわ
かると、黒眼がちの瞳にうっすらと涙をうかべて、か
なしげに私をじつとみつめた。

そうした二人の言葉で、私はいつか、この一家の過
去と現在とを知ることが出来た。あるいは、それは将
来もといつてもよかつたであらう。そして、もつとつ
きこんでいうならば、あるいは、私自身の現在も将来

も、この二人の言葉の中にちりばめこまれていたかもしれぬ。

私の隣りの部屋の中学生を、はじめはこの広瀬夫婦の長男と思っていた。だが、そうではなくて、学生も私と同じようにこの家の下宿人であることを、やはり、病んでゐる少年からきいて知った。中学生は夕方近くなると、早朝と同じようにひそひそと身支度をして出ていった。新聞配達をしているのであった。それも私は少年から聞いた。

しばらくは、私はこの中学生と顔をあわせたことがなかった。日曜日などに四分板の板壁ひとつをへだてて隣り同士に坐っていても、中学生の部屋からは咳ひとつ聞こえず、私が鉄筆で原紙をきる音だけが私の耳に異常に大きくこえるのだった。

私が、この中学生とはじめて顔をあわせたのは、私

がこの家にうつって来てひと月近くたった頃であつた。

崖上の霞町の大きな邸宅の庭には、新緑がゆたかな緑を風にそよがせていた。日曜日のことであつたが、いつものように私がおそい朝飯をたべていると、郵便配達夫が小包を配達して来た。福井義治——隣りの中学生の名宛であつた。それを、私は二階の自分の部屋にかえるついでに、中学生の部屋にもって行ってやつた。表書の字は上手な女文字であり、裏がえすと、おそらくは母親であろう——福井まさ、という名前が書かれてあつた。

「福井君、小包だよ」

私はそういつて隣りの部屋に声をかけた。中学生に似ぬ太い声がきこえ、むくんだような顔がその部屋からのぞいて小包を受けとつたが、しばらくして、中学生は新聞紙につつんだ黒砂糖のひとかけらを私の部屋にもって来て

「——さん、黒砂糖ですよ、あがりませんか」

といった。それは、母親の小包にはいつていたのである。私は、ふと、私の母親の面差おもざしを心にもいいうかべながら

「お母さんから？」

ときくと、中学生も、瞬間、青ぐろくむくんだ頬に、ほのかな微笑びしょうを走らせてうなずいた。

その日ではなかったが、それから間もないある日、私は中学生に

「どうして、君は、お母さんと一緒にいっしょにいないの」

ときいたことがあった。すると、中学生は

「親爺おやじも兄貴あにきも死んで、おふくろは妹や弟をつれて田舎いなかの親類しんるいをたよっていつてゐるんです——」

と、言いたくないことをいう時のように、ぼそり、ぼそり区切るくぎるようないい方で答えかえした。だが、そういいおわると、長い間苦しく心につかえていた思いがその言葉ではぐれ出したように、むくんだ頬をぱっと

紅潮させて父親たちのことを私に話してきかせた。

中学生の父親は、深川ふかがわで小学校の教員きょういんをしていたというのだった。半年ほど前、急な病気で死んだのだが、実は、中学生の兄が、前年の上海事変シャンハイじへんで戦死せんししたのが父の病気の原因げんいんであった。その死を悲しんで父は病気となり、兄の名を呼びつづけて死んだ——。それをいつた時、紅潮していた中学生の頬が、不意ふいに土いに血の気がひいていったかと思うと、ふっと言葉をきった。そして、しばらく何かを思いつめているように唇をかみしめていたが、急に悲しげに

「兄貴の死んだというのは、あの肉弾三勇士にくだんさんゆうしの廟行鎮びやうこうちんの敵てきの陣じんだったんです」

といった。力のぬけた声であった。それから、にっと笑うと

「兄貴は、ほんとに捕虜ほりよになって、銃殺じゅうぎつされたんだそうです、それがわかって、親爺は死ぬ前、天皇陛下てんのうへいかに申しわけない、申しわけないといくりかえしていまし

た」

と、吐き出すようにいった。

だが、私は、中学生といつもそうしたことを語りあっていただけではなかった。中学生と言葉をかわすようになったあとも毎日殆んど顔をあわせる機会などなかったことは、それまでのひと月余りと同じであった。

ただ朝早く中学生が出かける時、廊下から、咳くほどの声で

「いってまいります」

と、言葉をかけるようになったことだけが、以前とかわっていたといえはいえた。

中学生の部屋は私の部屋よりもおひどかった。それは、部屋といえるかどうかともわからぬほどであった。私の部屋との間仕切りの四分板をうちつけた板壁が、中学生の部屋では一番まともな調度のようにであった。私の部屋から削りとった二尺に足りぬ細長い窓から、晩春の明るさが、天井もなく荒壁の壁土がむき出

しになった板敷の部屋に、妙にものうく流れ込んでいた。中学生はその部屋で、毎日、英語や数学の受験参考書をむつりとよんでいた。母親の帰っているという田舎に近い高等工業を来年受験するというのが、中学生の希望であったのだ。

中学生は夕飯は新聞販売舗で出されるのを食べるといって、下では朝食しか食べなかった。それまで夕方にも私と顔をあわさなかったのはそんなわけであった。

私は、材木町の停留所から、7という系統の電車にのった。それは青山六丁目から六本木、溜池、田村町をとおって馬場先門、京橋と往復する系統であった。

私は、本郷の大学に行く時には、その電車を、京橋の終点までのもって、駒込行にのりかえたし、神田淡路町の膳写印刷に行く時は、日比谷で上野行にのりかえた。九時をすぎた電車はもうすいていた。私はほとんどいつも腰かけることが出来るのであったが、電車が

六本木から今井町、福吉町へかけ下る坂道にかかる
と、私は何とない安心を感じて、いつも、きまってる
つらうつらしはじめた。電車の震動と、晩春の暖かい
日差が、眠りの足りぬ私にこころよい睡気をさそった
からであった。

だが、うつらうつらするといっても、それは、せい
ぜい電車が田村町の交叉点にかかる頃までであった。
時間にすれば僅か十分そこそこのことであつただろ
う。私は、気づいて、みるともなく、電車が田村町の
交叉点を折れ曲がる時の女車掌のするしぐさを見てい
るのだった。それは、ポールをかけかえる後部車掌の
オーライという声をうけて、それを運転手にしらせ、
いそいで前の方の自分の持場の出入口に帰って行く、
ただそれだけのことであつたが、女車掌はそれが何か
たのしいゲームのひとつまでもあるように、いそい
そとしているのだった。そんな女車掌をみると、それ
が何故であつたか私にはわからなかつたが、私は心が

たのしくあたたまっていくのを感じた。

謄写印刷では、さまざまな仕事を引きうけていた。

しかし、私のような新しいものには、会社の決算報告
といったまとまつた仕事は与えられなかつた。会合の
集りの通知とか、葉判紙一枚ずりの趣意書とかが支配
人の手から与えられるだけだつた。そうしたものは端
物といつて、刷る数もしれていたし、同じように一枚
の原紙をきつても報酬はすくなかつた。だが、それと
て、いつもあるわけではなかつた。仕事のない日に
は、工場の二階の窓ぎわで、校正している女事務員た
ちを手伝つて、電車賃ほどの涙金をもらつた。そうし
て待っているうちに、新しい仕事にありつくことも出
来たし、支配人や事務の人と親しくなることが出来る
というみじめな望みもいだけたのであつた。

私が、信濃町のK病院のプリントをひきうけるよう
になつたのは、私に、いくらかの独逸語の知識があつ
たからだつた。それは医学生への教材のように思われ

だが、大判ノートにうすめられた原稿は、私には、たつぷり四五日分の仕事のように思われた。

だが、たといそんなまとまった仕事を与えられたにしても、学生の片手間仕事で明文社から貰うことの出来る金は、下宿代を払うのさえカツカツなほど僅かな額であった。それで食べてゆくには、一日中原紙をきりつづけねばならぬことが私にもわかるようになっていた。一期の授業料も私はまだ大学に納めていなかった。私がいだいていた夢は既にはかなくやぶれはじめていたのだった。

ある日、私が、西園寺公爵の邸の横の坂をおりて、謄写印刷、明文社と金文字をうかした表戸をあけると、支配人が私をみるなり

「――」

と、私の名をよびつけ、ひきずるようにそのまま、工場の奥につれていった。謄写印刷は間口は二間足らずの小さな店であったが、洞窟のように奥へ行くほどひ

ろがっていて、ザラ紙や印刷紙をうす高く積み重ねた薄暗い奥に、刷り屋たちが真黒になって忙しく謄写版を刷っていた。天井からゴムの紐をつるし、印刷インクをつけたローラーを動かすごとに、ゴムの紐がのび、原紙をはさんだ枠が紙にあわさって、一枚一枚と刷り上がって行くのだった。支配人は私をそこまでつれてゆくと、一枚の紙を私につきつけた。そして「駄目じゃないか、お前のは百枚も刷らぬうちに、こんなに破れてしまったんだぞ」と怒鳴った。

私は、十数人並んでローラーをうごかしている刷り屋たちの眼が、一斉に私にそがれているのを、うつむいたまま感じていた。ゴムの指サックをはめた左の手だけで、機械的に一枚一枚紙をめくって行くサラサラという音だけが私に聞こえていた。私は、自分自身の声と信じられぬような小さな声で、呟くように「すみません」